

絶妙の連携。ピリリ

迫る2025 シフト

3

9部 訪問看護師の力

神経難病を患い十数年前から訪問看護を受ける横浜市鶴見区の星晴美さん(73)。夫の安観さん(74)が自宅で介護してきたが、昨年2月、大腸ポリープであることが判明した。

手術入院していた4日間、実家で留守番をしていた長女由紀子さん(50)と次女寿美子さん(46)の元に毎日、訪問看護師が来てくれた。それまで父親から「おかげのことは俺がやるから大丈夫」と言われ、本格的に母親の介護をしたことはなかった。

「いじると汚れにくいよ」。訪問看護師の重田典子さん(46)は、おむつの交換の仕方を丁寧に教えてくれた。「母への介護で何か困っている」と、絶妙のタイミングで声かけがあった」と

寿美さんは振り返る。

星さんを担当する訪問看護師は、鶴見区医師会第2訪問看護ステーションの4人。重田さんのほか、金山昌子さん(48)と信太智美さん(38)が週3回、曜日ごと

に訪問する。管理者の本多幸子さん(50)も、所要所でリリーフに入る。

安観さんは「色々な訪問さんがいるから、私にとっ
ていい『スパイス』になる」と明かす。重田さんは

「リーダー」、金山さんは「経験豊富」、信太さんは「いやし系」のイメージだという。本多さんは、安観さんが悩んでいるときに、必ず察して来てくれる。

重田さんも、それを認める。「家族の方々がお互いの感謝を伝え合えるように、4人の看護師が、それぞれのキャラで絡み合うんです」

1月19日の訪問は、また別の「スパイス」が加わった。第2ステーションなどを統括する鶴見区医師会在宅部門の栗原美穂子さん(49)が来たからだ。安観さんにとって、2年数カ月ぶりの再会だった。十数年前に「初代」の訪問看護師として、精神面を支えてくれた。

安観さんはリビングに座ると、せきを切ったように栗原さんと話し始めた。「ブログ愛読してますよ」「お酒は何でもござれ」……。

気がつくとも2時間近くがたった。「栗原さんは、笑顔がすてきだね。こんなに大笑いしたのは久しぶりですよ」

訪問看護師たちは、絶妙のコンビネーションで利用者や家族を支えている。



星さんを担当する訪問看護師たち。左から重田さん、信太さん、金山さん＝横浜市鶴見区